7-P2-3

介護施設における転倒傾向がある利用者の薬剤の影響から見えてきたもの

〇石塚　豊[1]
[1]一般社団法人長野県薬剤師会

超高齢者社会を迎える中、ひと昔前には転倒骨折し入院するとそのまま寝たきりになってしまい、大きく余命に影響を及ぼすと言われていた。近年においても、早期離床、早期リハビリ等によりそのリスクは軽減しているが、高齢者にとってはその後の生活に及ぼす影響は大きいと言われている。

転倒に関しては、外傷・疾病によるものや、加齢による身体的機能の低下、精神的な部分や食生活を含む環境など様々な要因が考えられる。その中で薬剤に起因する転倒も少なからず報告されていることから、今回、長野県宅老所・グループホーム連絡会と協働して、実際に介護施設において、転倒傾向にある利用者について服用薬剤からその影響について調査を行った。

転倒傾向にある利用者には、ふらつき等の副作用が出る薬剤を服用している場合が多く、転倒の原因のとなりうることがわかった。高齢になると疾病等で複数の医療機関を受診することが多くなり、服用する薬剤も増える傾向にある。また、診療科が増えれば併用薬の把握や相互作用のチェックが難しくなり、副作用の発生率も高くなる。

その解消には、利用者がかかりつけ薬剤師・かかりつけ薬局を持ち、併用薬の把握、相互作用のチェック等をしっかりしてもらうことやお薬手帳の一冊化を促し、普段から携帯することで様々な場面で活用してもらう事が重要となる。

また、高齢者においては、加齢により薬剤の吸収や組織への移行の変化、代謝や排泄の機能低下により、今まで継続服用していた薬であっても副作用が発生することがある。
薬剤師は、体調変化があった場合には、まず薬の影響を検討し、その情報を多職種と共有することが必要となる。

しかし、転倒は薬剤の影響だけで起こるわけではなく、筋力の低下や視力障害、認知症の進行による見当識障害や不穏等の要因で更に起きやすくなる。

転倒を予防するためには、利用者の様々な生活の状況等も踏まえて対応することが大切である。

薬の影響がリスクの要因の一つと考え、薬剤師は、薬に関する情報を患者のみならず、その人の生活を支えている多職種と情報共有し、薬剤の影響を最小限に押さえるサポートをすることで転倒のリスク軽減に貢献できると考える。